
滅亡へのカウントダウン

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滅亡へのカウントダウン

【Nコード】

N7360E

【作者名】

後藤詩門

【あらすじ】

楽園のような南の島で幸福に暮らす二人の女性。だが、彼女たちは今まさに自殺を考えていたのだ。いったいそれは何故？

青い空に白い雲。

どこまでも続く砂浜に、寄せては消える淡い白波。

ここは赤道にほど近い南の島。

海岸から少し内陸に入れば椰子の木が群生し、その枝先にはカラフルな色の小鳥たちがやってくる。

さえずりがそよ風と共に運ばれて、耳に心地良い。

南国の風は甘い香りも運んでくる。

それは何種類もの熟したフルーツの芳香。

ここは一年中、食用となる果物が生育するのだ。

果物だけじゃない。

野菜や穀物、ナッツなども豊富に取れる。

海に潜れば、よりどりみどりの魚たちにも出会えるはずだ。

なんとも素晴らしい島である。

その昔、ハワイと呼ばれた島。

まさにパラダイス、地球最後の楽園と呼ぶにふさわしかった。

この素晴らしい場所に、その二人の少女は暮らしていた。

名前はイヴとリリス、二人ともまだ18歳である。

彼女達は毎日毎日、透き通るような珊瑚の海で泳ぎまわり、泳ぎ疲れるとヤシの木の木陰で昼寝した。

目が覚めれば、咲き誇る花畑の中をはしゃぎまわり、美味しい果実を見つけてはその甘さに舌鼓を打った。

まさにユートピア。

だが、それももう終わろうとしている。
それが、彼女たち自身の選択だからだ。

実は……彼女たちはこれから自殺することを考えていた。

普通の人間なら、何故そんなことをするのかといぶかしむことだろう。

この生活は、あまりにも勿体無い。

だが、彼女たちは普通の人間ではないのだ。

どんな人間なのだろうか？

外見はいたって普通。いや、むしろ快活で美しい少女たちである。それぞれの青春を謳歌しているように見える。それなのに、いったい何故？

では、その理由を説明しよう。かなり長くなるが歴史の授業とも思っ
て聞いてほしい。

さて、全ての始まりは西暦2008年に完成した、革新的な冷凍技術の開発にまで遡る。

この年まで、生きた人間を冷凍しそして生きたまま解凍する事は不可能だと言われていた。

体内にある水分が問題なのである。

ご存知の通り水は凍ると膨張する。

よく分からない？

そんな方は、空のペットボトルに水道水を満たし、それをご自分の家の冷凍庫に放り込んでもらいたい。

一晩もたてば氷となった水道水が膨張し、パンパンに太ったペットボトルを目にすることができはるはずである。

ともするとその膨張力は、プラスチック製のボトルを破壊することすらあるのだ。

つまり、これが問題なのである。

体内の水分子も凍る時に当然のように膨張する。

そしてプラスチック製のボトルと同じく、体の様々な細胞をその膨張力により膨らませ、時に破壊してしまうのだ。

そうなると人間はもう生きてはいけない。

解凍してもその体はすでに死体。運良く生き延びたとしても、細胞の破壊されたボロボロの体となってしまう。

悲惨でもあり、無惨でもある残りの人生。

もちろん、長生きはできない。

だがこの時代、その難問を解決した人物が登場する。

日本にある東東大学教授、馬胤清二^{またねせいじ}、その人である。

馬胤教授は体の水分の大半を占める血液を、特殊な人工透析装置を用いる事で、不凍液に近い物質に変換する技術の開発に成功したのだ。

この技術は後にMATANEシステム、あるいは単にコールドスリープ装置と呼ばれるようになる。

さて、この技術が開発され10年。実用化にこぎつけた頃、これを最初に用いたのは、誰あろう金持ちの老人達であった。

まだ人体実験も十分に行われていなかったこのシステムに、なぜこれほど地位も名誉もある老人達が申し込むのか、皆が首を傾げた。

その理由としてはまず、なんと言っても彼らには先がない事があげられる。

MATANEシステムの人体実験を何年も待っているうちに、彼らは死んでしまうからだ。

その焦りが……ならばいつその事、自分が実験台になろう、とい

う気持ちにつながった。

さらに別の理由もある。

これは一種のステータスシンボルになることに、彼らは気づいたのだ。

プール付きの豪邸や、運転手付きのロールスロイスと同じく、ゴールドスリープ装置付きの別荘、といった感じである。

当時、一台数千万から数億円もするこの装置は庶民の垂涎的。コレクター感覚でこの装置を手に入れた成金たちも少なくない。

このような理由で、とにかくこの金のかかる技術の先駆者は金持ちの年寄り達となったのだ。

これが西暦2018年のことである。

さらに10年が経ち西暦2028年になると、この技術は完全に確立されたものとして世間に認知されるようになる。

すると今度は金持ちの道楽だけでなく、お堅い国の施設にも活用されるようになった。

いわゆる、冷凍刑務所の誕生である。

死刑廃止論者達はこれ幸いとはかりにこの革新的な技術に飛び付いた。死刑の代わりをなすものとしてマスコミ等で紹介を始めたのだ。

世界世論も動き、遂には国連でも協議され、ゴーサインが出る。実験的に2人の犯罪者が刑に服した。

人権を憂慮して名前や犯罪歴は伏せられたが、かなりの凶悪犯であることには間違いない。

彼らは冷凍刑務所で懲役80年を宣告された。

だが、残念な事に冷凍刑務所受刑者は、この二人が最初にして最

後となる。人権養護団体の過激グループがこれすら厳しすぎると異論を唱え、抗議の自爆テロを始めたからだ。

世界各地の主要国で繰り広げられる破壊の嵐。目もあてられない惨劇に、国連もこの刑務所を閉鎖するしかなかった。

たった二人の冷凍刑務所受刑者は秘密裏にどこかの島に移されて、刑期を終えるまでずっと眠り続ける事になる。

さて、次にこのMATANEシステム、コールドスリープ装置が使われる舞台となったのは……宇宙である。

時は2038年。人類は遂に火星に向けて本格的な有人飛行を開始したのである。

だが、火星はどんなに速く飛んだとしても、片道半年はかかる長旅。

もちろん、飛行士たちはそのまま起きていても良いのだが、そうするとロケット内の食料スペースが馬鹿にならない。

だが、眠っていれば腹も空かないだろうという事で、狭い宇宙船内を快適に過ごすためにも、この技術は欠かせないものとなる。

こうして人類は火星をその領土とし、コールドスリープ装置はかつてないほど有効利用されるようになった。

そしてさらに10年が経つ。西暦2048年のこと。

ここまできるとコールドスリープ装置は冷蔵庫くらいの大きさになり、まさに家庭に一台の時代となった。

しかし、ここで大きな社会問題が起きる。

それは、冷凍シンドロームと呼ばれる病気の蔓延で、早い話が鬱病に近いものであった。

学校で嫌なことがあった、または会社で上司に怒鳴られた。もういや！ そんな時、そうだコールドスリープしよう。こんな感じで学校や会社をサボる者が続出し始めたのだ。

瞬く間に世界的な社会問題となると、国連はこの年、コールドスリープ禁止条例を発表する。

政府の特別な許可がある者以外は、冷凍睡眠してはならないという条例である。以前に眠りについた者も、老人や病人以外はこの年に叩き起こされた。

起きて働け！ とまあこういうこと。

かなり強引な条例ではあったが、働かない夫や学校に行かない子供たちにうんざりしていた奥様方の支持を得て、この法律は速やかに執行された。

しかし……

平和であつたのはここまでである。

これから先の話はあまりにも悲惨。

そのため、記述は簡潔に済ませたいと思う……

さて、西暦2058年。植民地星となった火星で、新種のウイルスが発見された。

驚くかもしれないが、火星はまったくの死の星ではないのだ。原始的な生物の存在が確認されていた。

だから、新種のウイルスの発見もさほど驚きはしなかった。

ただ研究のため、このウイルスは地球に持ち帰る事よう指示される。

別に隠しはしなかったのだが、この一件はニュースにもならず、サイエンス雑誌に辛うじて一ページの特集が組まれたにすぎなかつ

た。

この時代になると人類は冥王星にまで手を伸ばしており、火星の記事はもう古いと敬遠されがちだったのである。

さて、西暦2068年。火星から帰ってきたスペースシャトルがアフリカ奥地で原因不明の墜落事故を起こした。

載せてきた新種のウイルスも行方不明となる。簡単な搜索しか行われず、国連はアフリカ関係国に見舞金を支払い、この問題に決着をつけた。

さらに10年後、西暦2078年。

アフリカで奇妙な伝染病発生。

発病後3日で死に至る強力なもので、空気感染する厄介ものでもあった。致死率は99%、あらゆるワクチンがきかない。

科学者の調べで、それは新種のウイルスが原因と断定される。

そう、火星のウイルスであった。

このウイルスはまさに奇妙なウイルスだった。

何故ならこのウイルスの感染者は、必ず男だからである。

不思議な事に女にはまったく影響はない。

まさに奇妙な伝染病であった。

この病はあつという間に世界中に広まっていく。

西暦2088年、地球上の全ての男がこのウイルスに感染した。文字通り全員である。99%が死に絶え、生き残った者も寝たきりとなる。

後には……女たちしか残らなかった。

これは大問題だった。女たちだけでは子はできぬ。つまり、人類はまさに滅亡の危機に瀕してしまったのだ！

もちろん、人間も馬鹿じゃない。こうなることを予測し、あらゆる手段をこうじていた。

まずは精子の冷凍保存である。

別に画期的でも何でも無い手段。百年も前から使われていたものだ。

だが、いざ試してみると……残念ながら失敗に終わる。

実は精子の貯蔵を始めた時、すでにウイルスはほとんどの男に感染しており、その男たちの精子もやはりウイルスに感染していたのだ。

何度、人工受精させてみても失敗続き。

元気に生まれてくるのは女の子だけで。男の子が生まれてくると、生後三日で死ぬ徹底ぶりである。まさに奇妙な伝染病。

こうして、冷凍精子はまるで役に立たないことが判明する。

次に女たちは、コールドスリープされていた男たちに目を向けた。西暦2048年に、コールドスリープ禁止条例ができていたためあまり数はいない。

それでもやるしかない。女たちはすぐ行動する。もちろん、すぐに復活させては駄目だ。みすみす火星ウイルスの餌食になつてしまふ。そこで女たちは、その昔アメリカ合衆国ハワイ州とされた島々を特別保護区に指定して、徹底的にウイルスの除去を行ったのだ。島全体を特殊な磁気シールドで覆い、そしてそこにコールドスリープから目覚めさせた男どもを住まわせてみる。

この計画はなんとか成功した。

男たちはウイルスの驚異から守られ、生き延びたのだ。

この成功に、世界中から次々と目覚めさせられた男たちがハワイにやってきた。

そして、世界中から選ばれた美女たちと、酒池肉林の生活を楽しんでんだのだ。

彼らの役目はただ一つ、子づくりである。

人類は救われたかに見えた。

しかし……

今回もまた、実験は失敗してしまうのだ。

それは何故？

今回の失敗はあの殺人ウイルスのせいではない。

その原因は……老いである。

誰しも老いれば、ナニが弱くなるものだ。

つまり、アレが立たたない事が失敗の理由。

仕方あるまい、コールドスリープ禁止条例のせいで、当時まで眠っていたのは最初期の者たち……つまり、金持ちのじじいばかりだったのである。

性欲も寄る年波には勝てず……

こうして、この計画は挫折する。

そして、西暦2098年。地球上に生きていた女たちは全てを諦めていた。

男のいない世界……フェミニストたちはさぞ良い世界になるだろうと思われるかもしれない。

だが、違った。

犯罪は増え、精神を病む者が蔓延する。自殺者が毎年19%にも及んだ。

ここに至って国連は一つの重要な決定を下す。
自殺の合法化である。

自殺の合法化、それは地球上から人類という存在を速やかに消し去る事を目的とした凄まじい法律である。

もはや、つがいとなる男はいない。

遅かれ早かれ人間は死に絶えるのだ。

ならば、辛い世の中に絶望しながら暮らすよりも、死んで楽になるう。そんな無謀とも言える考え方。

だが、意外にもこの法律は世界中に受け入れられた。

全人類安楽死推進福祉法、それがこの無謀な法律の正式名称だ。

世界中の自殺を望む人々に、お望みの自殺方法を無償で提供するのがこの法律の趣旨。

ピストル、毒薬、睡眠薬の多量摂取、飛び降り、入水、リストカットなどなど、ありとあらゆる自殺方法をサポートする。

そして、男のいない女たちは政府の支援のもと次々に自殺していったのだ。

ついに西暦2108年、地球上には二人の女しか残されていないかった。

それが彼女たち、イヴとリリスなのである。

なぜ、彼女たちが残されたのか？

それは彼女たちが、コールドスリープから目覚めた男たちの妻であつたからだ。

世界中から集められた選りすぐりの美女、あの老人たちのための喜び組（某北○鮮の国家元首のためだけにつかえた女性たちの通称）である。

残念ながら老人たちに生殖能力はなく、彼女たちは妻というより看護師役をしていたにすぎなかったのだが……

国連は、まさかとは思ったが最後の最後におじいちゃんたちが奮起して、彼女たちを孕ませる事があるかも知れないと考え、彼女たちには男たちが死にたえるまで決して諦めてはならぬと厳命していた。イヴとリリスが13歳の頃の話。

なぜ、こんな子供が老人たちの妻になったのか？

もちろん、彼ら老人たちの中にロリコンがいたからだ。まったく世も末である。

こうして、地上には年老いた数人の男たちと若いイヴとリリスの二人だけが残された。

案の定というべきか、老人たちはあつという間に死に絶える。

結局、彼らは少女たちに一度も手をつける事なく（インポのため）、少女たちは処女のまま残された。

良かったのか悪かったのか微妙なところだが、少なくとも人類の希望は絶えてしまう。

男たちが死んで彼女たち二人は、この時、地球上で動いている最後の人類になった。

最初、すぐに自殺して皆の後を追う事も話し合った二人。

だが、せつかくだから大人になるまでは生きてみようという事になったのだ。

せめて18歳になるその日までは……

そして今日。

「お誕生日、おめでとうリリス」

暮れなずむ西の空をバックに、微笑みつつイヴが囁いた。

「うん……ありがとうイヴ」

今度は少し寂しそうに、リリスもうなずく。

今日はリリスの誕生日。先月18歳になったイヴに続き、彼女も大人の仲間入りをしたのだ。

いよいよである。二人に残された時間は少ない。

「後悔……しない？」

「うん、もう十分生きたから」

「そうね。それに二人だけは寂しすぎるもんね」

「うん……それに、あなたとなら私……死ぬのなんか怖くないわ!」

「……リリス」

「……イヴ」

夕闇のなか、二人の影が一つになる。
濃厚なキスを、時間が止まったかのように繰り返す二人。

当然と言えば当然かもしれないが……何時しかこの二人は愛し合っていたのだ。

すなわち、レズビアンである。

「私……男なんかに触れられないで本当に良かった。だって、綺麗な体のまま、あなたと二人死んでいけるもの」

「本当にそうねえ。生き残った男たちが、あのおじいちゃんたちで良かったわよね」

「うん。でも、あのおじいちゃんったら、私のオシリを撫でたことがあったのよ！ 失礼しちゃうわ」

「あら、それを言うなら私なんか胸を触られたのよ」

こんな会話の後、二人はくすりと笑う。
セクハラされた思い出も今となれば笑い話だ。

「じゃあ……そろそろ行こうか？」

「うん、行きましょ」

こうして二人は手をつないで歩き始める。

彼女たちの顔に後悔の色はない。

これは愛し合うイヴとリリスが話し合っ出た結論なのだ。
若くて綺麗なうちに死ぬ。素晴らしいことではないか。

彼女たちの自殺方法はもう既に決まっていた。

多量の睡眠薬を飲み、そしてすぐに二人一緒にコールドスリープ装置に入る。

これが最善と思われた。

永遠の若さを保ったまま、一緒に永劫の未来まで共に眠り続ける。
そう決めたのだ。

もちろん、生き延びるだけなら可能である。この島はそのための
装備を十分備えている。おばあちゃんになるまで二人で行きしてい
ける。でも、それが何になるというのだ？

もうこれ以上は……何も望めない。

人生最後の日を迎えた二人は、いよいよその時を迎えるため、自
分たちの部屋があるコテージに戻った。

さて、彼女たちが部屋に戻る一時間前のこと。

誰からも忘れられていたのだが……あの冷凍刑務所に服役してい
た二人の男がその刑期を終えて、たった今日を覚ましたのだ。

80年の歳月にも関わらず、彼らの姿は若々しい。これもコール
ドスリープの恩恵であろう。

「……うつ、うーん」

「よう、おとなりさん。目覚めはどうだい？」

「あ、ああ……悪くはないな。あんたは？」

「上々だ。それにしても……ここは何処なんだ？」

「俺に聞くなよ。あんたと同じで80年も眠っていたんだからな」

「ははは、違いねえや。しかし、それにしても人気のねえ刑務所だなあ」

「看守もいねえのか？ 職務怠慢だな。それともみんな眠っちゃったのか」

「ちよつと、外に出てみるか」

こうして二人は刑務所を脱け出した。

偶然なるかなこの二人、どちらもアダムという名前である。

そして、二人の犯罪歴も偶然な事にまったく同じ。

彼らは無人となった冷凍刑務所を抜け出してあたりをさ迷った。すると、熱帯の森の中に何かを発見する。

「見るよ、綺麗なコテージがあるぜ」

「うつひょう、中は食い物だらけだ！ 酒もある」

「げげっ、何故だかコールドスリープ装置もあるな……これだけは見たくねえ」

「だけど、寝室にはいいベッドがあるぜ。ダブルベッドだ！」

男たちははしゃいだ。

当然のようにコテージに不法侵入して、久しぶりに人間らしい生活を楽しむ。

大いに飲み、大いに食った。

風呂にも入り80年の垢を落としたあとに、ようやくソファークツろぐ二人。

すると……

「ふう、さてこうなると女が欲しくなるな？」

「はははは、違いねえ。もう80年も抱いてねえからな」

「ん？ しつ、静かに！ あれは誰だ？」

「なにい、誰か来たのか？ このコテージの持ち主かな」

男たちは明かりを消して窓から外をうかがった。

浜辺からコテージをつなぐ一本道に二人の人影が見えたのだ。

アダムたちは知らない。この二人こそ、さっきまで地球最後の人類だった二人。そして今でも地球最後の女性、つまりイヴとリリスである。

「おい、女だぜ？」

「ああ、それも極上のな！」

生唾をゴクリと飲み込んだ。

当然であろう、長いこと禁欲生活を送ってきた二人である。

眠っていたとはいえ、体は欲望に忠実だった。

それに彼らは……無類の女好き。

犯罪歴も婦女暴行がらみである。実に100人以上の女性を歯牙にかけている卑劣な男たちなのである。

「おい、アダム。感づかれるんじゃないぞ！」

「ああ、分かってるって、アダム！ いひひひ、きたきた。あと10秒だ」

「いや、あと9秒だ。8秒、7秒、6秒……」

「あと5秒、4、3、2、1……」

二人はコテージで息を止めた。

その下半身をギンギンにおったてながら……

そして、そこに、最後の晚餐を済ませようと手をつなぎやってきたイヴとリリース。

二人の運命は……？

いや、ここでは多くを語るまい。

それは、彼女たちにとって、極めて悲惨な出来事だったからだ。この日、二人の間は引き裂かれ破滅を迎える。

だが、一つ良い知らせもある。

それは、この日を境に人類はその数を増やしはじめたということ。

そう、人類滅亡は……避けられたのだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7360e/>

滅亡へのカウントダウン

2011年10月4日20時08分発行